こちバス新聞（大豊町怒田地区：地域づくり体験号）

稲刈りは単なる作業ではなく、お米を収穫するための大切なプロセス。

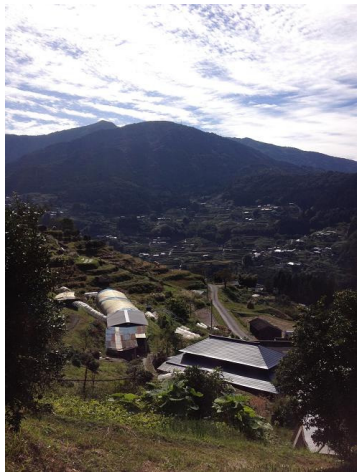
地域づくりを体感する

10月13日(土)。晴天。心地よい風が山間を吹きぬける一日。大豊町怒田地区にある氏原学さんの農園で稲刈りなど秋の実りの収穫体験を学生がしました。

これは、こちバスツアーと題して、大学がサービス・ラーニングの一環として実施している企画です。高齢化や過疎化など様々な課題を抱える地域に活力を取り戻そうと、地元の方と大学生が協働で地域づくりに取り組んでいる事例を学ぼうと高知大生18人が参加しました。

共に稲を刈る

到着後、一行は3グループに分かれ、鎌を手にいざ現地へ。山の棚田は黄金の稲穂が頭を垂れて、収穫を待っています。学生たちは氏原さんに手ほどきを受けながら作業を進めました。



一緒に食卓を囲み、労をねぎらう

お昼休み。お腹をすかせた学生たちを待っていたのは、上級生がつくった生パスタと氏原さんの奥さまが手作りしてくださったカレーに田舎寿司、サラダ、唐揚げに紫蘇や栗など山の恵みを使ったデザート♪

労働で汗をかいた後だけにみんな争っておかわり。満腹になった後も、忘れずに率先して食器を洗うなどさすが大学生の気遣いを見せました。

一粒に込められたもの

全作業終了後、氏原さんからは「今日した作業は稲を刈ることだけれど、何のために稲を刈るのか。それはお米をとるため。この作業の先に続く目的を考えてください」とのメッセージ。参加者からは「普段何気なくのこしていたごはんの一粒一粒がこんなに苦労して収穫されていたことを知って驚いた」との感想が。学生たちはそれぞれに働く意味を体感したようでした。

10月16日発行コラパ～